



介護サービス利用者の

「ハタラク」を支える実践ガイド

介護サービス利用者の社会参加活動促進事業 事例集





福岡100 何歳でもチャレンジできる未来のまちへ

アジアのリーダー都市へ FUKUOKA NEXT

要介護状態になっても、「やりたい」を活かして地域で「ハタラク」

福岡市では、介護サービス利用者の「**やりたい**」「**ハタラク**」を支える取組みを促進するため、
令和7年度から「介護サービス利用者の社会参加活動促進事業」を実施しています。
この事業では、福岡市がモデル事業所として選定した介護サービス事業所に
アドバイザーを派遣するなど、伴走支援を行っています。

本冊子では、令和7年度のモデル事業所の実践から生まれた事例や効果、支援のポイントをご紹介します。

① 「ハタラク」とは

本事業における「ハタラク」とは、謝礼金の有無にかかわらず、
介護サービス利用中に本人の経験や得意なことを活かして、ボランティア活動をするなど
地域の誰かのために役に立つ活動のことです。

本人の「やりたい」
好きなこと
得意なこと
これまでの経験
想い・意欲

「ハタラク」
本人のできることを通して
地域の誰かのために
役に立つ活動

社会参加・地域での活躍
地域や企業、
事業所内で自分らしく
活躍できる場や
役割につなげる

② なぜ今、「ハタラク」が必要なのか

社会とのつながりが減少しやすい
要介護状態になると、
外出や他者との
関わりが減り、
孤立や意欲の低下に
つながりやすくなります。

生きがい、やりがいは心身の活力になる
役割や社会参加は、
生きがいや
自己有用感を高め、
心身の健康維持にも
効果があるといわれています。

介護サービス事業所の新たな役割
利用者の活躍の場が
広がるとともに、地域や
企業をつなぐ拠点として、
新たな役割が生まれます。

だからこそ、介護サービス事業所が「**ハタラク**」を支えることが大切です。

③ 「ハタラク」がもたらす効果（三方よし）

本人にとって
- 生きがい、やりがいの向上
- 自己有用感の高まり
- 社会とのつながり
- 心身の活力の維持・改善

職員・事業所にとって
- 支援のやりがいの向上
- 利用者の新たな可能性の発見
- 職場の活性化
- 事業所の魅力向上

地域・企業にとって
- 担い手の確保
- 世代間交流の促進
- 地域とのつながり強化
- 共生社会の実現

本事業の流れ ～「ハタラク」の取組みを広げるために～

1 介護サービス事業所などを対象にセミナーを実施



2 モデル事業所を選定し伴走支援



※モデル事業所同士で成果や課題を
共有するための「情報交換会」の様子

3 本冊子で事例・工夫を共有



4 多くの事業所に「ハタラク」が普及することを目指します



実際に介護サービス利用者の「**やりたい**」「**ハタラク**」を支えるためには？
次のページでは、成功に導くためのポイントを紹介します！

介護サービス事業所が「**ハタラク**」を成功に導くために、ポイントとなる

「7つの力」

1 本人の想いに共感する力

活動内容ありきではなく、本人が本当に「やりたい」と思っている活動を一緒に考えていきます。そのためには、本人の想いや価値観、関心領域等に関するアセスメント力が求められ、傾聴と共感、情報収集のスキルが必要です。

アセスメントツールや、日常の何気ない会話など方法にとらわれず、その人に合った関わりの中から「やりたい」という想いを汲み取ってみましょう。

2 本人の状態を把握する力

本人のやりたいことが起点にはなりますが、それが実現できる認知機能・身体機能はどうか、冷静な判断が重要になります。本人の日常や活動等の能力に関するアセスメント力が求められ、認知機能、身体機能、日常生活動作（ADL）等に関する知見と見極めのスキルが必要です。

本人に対して

場や環境に対して

3 場を開拓／用意する力

本人が得意なことやできることを起点に、地域の中でそれができる場所や仕事を探します。一般企業や商店、自治会などに尋ねてみることもできますし、関連法人などがあれば、そこで探すこともできます。地域の困りごとを解決するという視点もあるでしょう。

本人の望む活動の場や適した環境を事業所内外で開拓・用意する力が求められ、地域資源に関する情報収集と共通課題を抽出するスキル（営業力）が必要です。

4 場を整える力

活躍の場を見つけた後は、具体的に何曜日の何時からどれくらいの時間、どんなことをするのか、企業などと調整をしていくことになります。

本人の想いや能力が発揮されるような場にするために調整・交渉するスキルや、柔軟な発想で場をつくっていくスキルが必要です。（仲間づくりの場、居場所としての場、地域とのつながりの場へと変換するスキルなど）

5 本人と場をつなげる力

当日、スタッフの誰が同行し、何をどのようにフォローする必要があるのかを検討します。場での活動や役割を分解する力が求められるので、作業分解スキルが必要となります。また、本人の想いや状態とマッチングさせる力、シミュレートする力が求められ、マッチングとシミュレーションのスキルが必要となります。

6 地域での自立や参加につなげる力

この活動は、介護サービス事業所と企業や団体だけではなく、地域住民も巻き込みながら進めていくことが望ましいと考えられます。機能や役割の回復とともに、本人／家族／スタッフ／地域の人とのコミュニケーションを促し、仲間づくりと社会参加に位置づける力が求められ、地域共生の視点とファシリテーションのスキルが必要となります。

7 継続する力

1～6を丁寧にやっていくと見えてくるものですが、本人の活動の継続、事業所の安定的な運営、どちらも叶えられるのが理想の形です。

継続には、スタッフへの教育やOJTのスキルが求められます。また、この取組みを事業所の売りにするブランディング力や、地域包括支援センターやケアマネジャー、公的な関係機関と調整するスキルも求められます。

出典：一般社団法人 人とまちづくり研究所
『つながる・役割・はたらく～介護事業所から広がる「社会参加活動」の始め方～』をもとに、一部改変。

介護サービス利用者の社会参加活動促進事業

福岡市では、モデル事業所にアドバイザーを派遣し、事業所の職員が「7つの力」を身に付けながら、「ハタラク」の実践につなげられるよう伴走支援を行っています。

一般社団法人 人とまちづくり研究所

つながる・役割・はたらく
～介護事業所から広がる
「社会参加活動」の始め方～

出典元はコチラ →

施設名

社会福祉法人 敬愛園

デイサービス博多の森

スモールスタートで広がる「ハタラク」デイサービスの実践



近隣にある小学校の図書室の本を修繕する様子。

注目ポイント

1 本人の想いに共感する力

利用者との普段の何気ないコミュニケーションの中から、ぼろっとこぼれた一言、わずかな表情の変化などを読み取り、本人の意欲を掻き立てるものが何なのか、探求しました。

2 本人の状態を把握する力

洗車や草むしり、食器洗いなど、事業所の中にある身近な作業や長年本人がやってきた作業から始めることで、挑戦できることのハードルを少しずつ超えていきました。

日常に溶け込んでいる「活躍のヒント」を感じ取る

福岡空港を一望する小高い丘の上に佇むデイサービス博多の森。管理者の喜井伸幸さんは、「閉じこもりや認知機能低下が懸念される中で、役割や生きがいを重視した社会参加支援の必要性を強く感じていた」と言います。

今回、モデル事業所として参加するにあたっては、他のスタッフも巻き込みながら一つずつ進めました。大切にしたのは、密なコミュニケーションです。利用者との普段のコミュニケーションの中にアンテナを張り巡らせ、ぼろっとこぼれた一言、わずかな表情の変化を読み取り、それをきっかけに本人の意欲を掻き立てるような計画書作成につなげていきました。

この取組みがスタッフにも大きな変化をもたらしました。喜井さんは、「(利用者の)意欲を掻き立てるというところに重点を置くと、今まで以上に興味を持って動けるようになりました。スタッフ間でも、こんなことを発見したよ、という会話が増えて、コミュニケーションも密になりました。」と語ります。



事業所の送迎車を洗車中の様子。



近隣の農園でさつまいもを栽培している様子。

スモールスタートでみんなで変化を「体感」しながらすすめる

地域密着型通所介護という特性上、スタッフはドライバーを入れて6名。少数精鋭の現場では、「ハタラク」の始め方も工夫しました。

まずは、事業所の送迎車の洗車や敷地内の花壇の草むしり、食器洗いなど、事業所内でできることから挑戦しました。メリットは、事業所内での活動なので、スタッフ・利用者、みんなの目に触れること。みんなで変化を体感しながら活動を進め、次のステップとして、地域とのつながりを活かし、近隣の小学校との連携に乗り出します。

学校側には「子どもたちが高齢者や認知症の方と触れ合う機会を作りたい」という思いもあったそうで、週に1回、学校の司書の先生の指示のもと、図書の修繕やシールの貼付、本棚の整理などを行っています。あえて小学生と「直接交流」する形は取らず、同じ空間で静かに仕事を行うスタイルを選択。これにより、予期せぬ事故を防ぎつつ、自然な形で世代が交わる心地よい環境が生まれました。利用者からも「作業の最中はとても働いている感じがするね」と、社会とつながる確かな手応えが聞かれています。

ポジティブな変化の波及で生み出される事業所・地域の好循環

デイサービス利用中の生き生きとした姿を知った家族は、「家でも(できることを)やってもらおうかね」と前向きに変化しました。また、楽しそうに働く仲間の姿を見て、男性利用者が「僕もやろうか」と巻き込まれていくという、事業所内の空気全体のポジティブな変革も起きています。

今後は、近隣の農園と連携したさつまいも栽培や、収穫物を子ども食堂へつなげる取組みなども視野に入れて、地域の中の様々な資源をつなげていく予定です。身近なところから、けれど確実な一歩を積み上げるチーム作りは、大きなヒントになるはずです。



種別：地域密着型通所介護
所在地：博多区
平均利用人数：12人
平均要介護度：1.64

生活相談員　古賀 龍也さん

私たちは、利用者様一人ひとりの生活史や価値観に寄り添い、「何ができないか」ではなく、「何ならできるか」を職員みんなで考えることを大切にしています。日々の何気ない会話や表情から、その方らしい役割や活躍の場を見つけ、小さな一歩を積み重ねてきました。その積み重ねは、利用者様の笑顔や意欲だけでなく、職員の気づきや地域とのつながりにも広がっています。これからも、一人ひとりが役割と生きがいを感じながら、地域の中で自分らしく活躍できる場づくりを大切にしていきます。

case 01

施設名

社会福祉法人 ふくしをデザイン

特別養護老人ホームなごみの里

“老人ホーム”で切り拓く自己実現への挑戦



地域のコーヒー店で販売しているギフトボックスの箱折り作業などをしている様子。

注目ポイント

3 場を開拓／用意する力

地域の中にあるコーヒー店とコラボレーションしました。
難易度の高い作業も、自助具などを準備することで作業がしやすくなる工夫を施しました。

4 場を整える力

コーヒー店の店長には施設に見学に来てもらい、作業を担う利用者との交流の機会を持つことで、次第に「ともに働く仲間」という関係性が生まれました。

安心安全が担保されている入所施設だからこその挑戦

久山町にほど近い福岡市東区の住宅街に位置する、特別養護老人ホームなごみの里。平均介護度3.8、半数近くが認知症自立度Ⅲ。利用者74名が暮らす施設です。

入所施設での「ハタラク」への挑戦は、社会参加に向けた活動を「なぜやるのか」を深めるところから始まりました。「施設に入所することで、誰かの役に立つとか働くといった選択肢が、そもそもはじめから除外されていないか？そこを問い直す事から始めたい。」そう語るのは、作業療法士の香月真さん。特別養護老人ホームは24時間スタッフの支援が入る環境です。それは、視点を変えると、安心安全が担保されている環境ということ。「だからこそ、『ハタラク』という手法を通じて、安心して自己実現に向けた挑戦ができるのでは、と考えました。認知症によって本人が不穏になった際の単なる『落ち着かせるための材料』や『形骸化したレクリエーション』としてあてがうことがあってはいけないと考えています。」（香月さん）



作業をしやすくする自助具を使って作業を進める。



《ガーデンカフェNanの木》店長も来訪。

直感的に動ける「自助具」の開発とコーヒー店との連携

なごみの里の実践には、地域のコーヒー店《ガーデンカフェ Nanの木》とのコラボレーションがあります。片麻痺のある利用者が片手でコーヒーを挽いて淹れる活動から始まったこの縁は、お店から「ギフトボックス用の箱折り」や「ラベル貼り」のオーダーを受けるまでに発展しました。

一方で、活動を進める上での課題もありました。認知症や麻痺のある利用者にとって、箱を平面から立体へ組み立てる複雑な工程や、透明なパッケージの中央に綺麗にシールを貼る作業は難易度が高いものでした。

そこでガイドに沿って作業が行える自助具を作成し、迷わずに取り組める環境設定をおこないました。そうすることで、スタッフが手を出しすぎず、本人の達成感を守りながら、作業を進める事ができました。仕事を開拓するだけでなく、利用者の得意・苦手を理解したり、作業療法的な視点から道具の工夫ができるのは、専門職がいればこその強みです。

参加した利用者たちは「お手伝いが必要ならやらんといかんね」と満面の笑顔を見せ、完璧な仕上がりで「自分にもできた」という誇りをその手に取り戻しました。

老人ホームの新しいモデル企業が仲間になる

《ガーデンカフェ Nanの木》店長自らがなごみの里へ足を運び、施設の様子を見学されたことで、ともに働く仲間だという実感のもと、企業としても、社員教育の一環として、担当スタッフをつけて一緒にこのプロジェクトを走らせることになりました。単なる作業の提供ではなく、特養の入居者を「地域の生活者」へと繋ぎ直す地域づくりのモデルとなっています。全国でも特養での「ハタラク」の実践例は少ないため、入居者の安心安全を担保してできる新しいチャレンジに期待が高まります。



種別：介護老人福祉施設
所在地：東区
利用者数：74名
平均要介護度：3.8

チームリーダー　松尾 誠さん

特養でも最期まで地域社会の一員として過ごし、誰かの役に立つ喜びを諦めない社会を目指して「ハタラク」に取り組みました。

協力店舗のお仕事を通して、入居者様が役割を持つことを大切にした結果、参加者から「若い人が盛り上げてくれて涙が出た、何かすることがあるのが良い」との声が上がりました。スタッフも、いつもと違う生き生きとした表情やこだわりに触れ、入居者様の新たな可能性を見出す契機に。

特養が介護保険サービスの枠を超え、社会と繋ぐハブとなる一歩を踏み出せたと実感しています。

case 02

施設名

小規模多機能ホーム
なごみの家しかた

「ハタラク」姿が「できる」と「ありがとう」の輪を広げていく



小学校と一緒に地域の祭りの準備をしている様子。

注目ポイント

5 本人と場をつなげる力

小学生の活動のサポート役として利用者は活動に参加することで、小学生の柔軟な発想やアイデアを引き出しつつ、利用者のやりがいを育む環境づくりをおこないました。

6 地域での自立や参加につなげる力

小学校の授業で生まれた交流がお祭りやゲームなどの共同体験を通して、世代を超えた個人と個人の結びつきへと変化していきました。

活躍の場づくりは介護職だからできる仕事

福岡市早良区にある「なごみの家しかた」では、利用者の活躍の場を創出する取組みを続けています。「いくつになっても、自分らしく輝き、誰かの役に立てる。その可能性を大きくひらく鍵が、『ハタラク』『活躍する』姿です。」と語る、代表の宮川伸吾さん。本人の「～したい」を叶えるため、環境を整えることも介護職の仕事であるという思いから、利用者さんが時間を忘れて没頭できるものは何か、ワクワクすることや長年の経験やスキルがあるものは何かを見極めています。

企業コンソーシアムのつながりから生まれた活動

認知症フレンドリーシティの実現に向け、福岡市では認知症の人とその家族、企業・団体、医療・介護・福祉事業者、行政で構成されるコンソーシアム「福岡オレンジパートナーズ」があります。このコンソーシアムがきっかけとなり、（株）ロッテとの協働がスタートしました。



“歯”という自身の強みを活かした活動。

80代の女性利用者は、若い頃から店頭販売の経験があり社交的な方なので、イベントなどで咀嚼チェックガムやキシリトールガムなど商品をPRしておられます。加えて80歳を過ぎても入れ歯はなく、全て自分の歯。歯を大切にすること、しっかり噛むことの大切さを伝える活動をしています。

小学校との連携で生まれる日常的な世代間交流

モデル事業所の取組みとして、地域の小学校のつながりから、小学3年生、4年生を対象に認知症や高齢者のことを伝える授業を実施しました。その後、小学生主導で、「なごみの家しかた」の拠点がある四箇田団地を盛り上げるために四箇田団地祭りを企画・実施したり、高齢者の笑顔を引き出すゲームの考案・実施をおこないました。

利用者の皆さんは、小学生の授業の一環としておこなっている活動のサポート役のような関わり方をしています。事業所や学校の授業といった枠を超えて、地域全体に笑顔と温かい活気をもたらす新しい世代間交流が育まれています。



事業所内の世代間交流が地域全体へ広がる。

「ハタラク」がもたらす日常の関係性の変化

子どもたちと利用者の交流が続く中、気づけば「おばあちゃん」ではなく「チヨコさんいますか？」「ヨウコさんいますか？」と個人名で尋ねてくる関係が築かれたり、「この前のイベントの御礼に」と風船ガムをくれたり、日常的なお付き合いの風景へと変わっていきました。

このような活躍の姿や地域でつながりを持って暮らしている姿を見たご家族は、「そろそろ施設かなと思っていたけど、まだ自宅で頑張れるかも」と意識が変わっていきます。



種別：小規模多機能型居宅介護
所在地：早良区
平均利用人数：7人
平均要介護度：1.9

計画作成担当者　宮嵜 みちよさん

地域の小学校との交流で「ギャル」のお題に必死でジェスチャーし、子どもたちを喜ばせようとする88歳の利用者さんの姿がとても印象的でした。

取組みを通じ、利用者さんが「介護される人」から「誰かの役に立つ人」へ変化していく姿を目の当たりにし、「ハタラク」活動が「生きがい」や笑顔を引き出す大きな意義があると実感しています。大切にしたのは、お一人おひとりの「できること」や「～したい」に丁寧に向き合い、輝ける出番をデザインすることです。今後も誰もが誇りを持って活躍できる場所作りを続けます。

case 03

施設名

医療法人 優誠会

デイサービスささえあい太陽まとば

「やりたい」が引き出す生きる力と地域との出会い直し



近隣にある小学校の校門の前で、スクールガードをしている様子。

注目ポイント

7 継続する力

利用者の社会参加に関する取組みを、「まとばハタラク新聞」を通して
ご家族やケアマネジャーなど外部へ
発信しています。
少しずつ、取組みの認知度が
上がっています。

「できること」と「やりたいこと」の違い

福岡市南区にあるデイサービスささえあい太陽まとばは、障がいの有無にかかわらず20代から100歳を超える方までが共に過ごす「共生型」の事業所として、ご利用者様一人ひとりの「その人らしい暮らし」を大切にしています。

「これまで私たちは、『何ができるか』という身体機能を中心とした支援を行ってきました。しかし、ご利用者様が本当に望んでいるのは『誰かの役に立ちたい』『地域とつながっていたい』という想いではないかと考えるようになりました。」と、管理者の土屋茂樹さんは語ります。その象徴となったのが、認知症のあるＮ様とのスクールガード活動です。

「愛する地域で、もう一度人の役に立ちたい」

Ｎ様は地域の運動会や公民館活動に積極的に参加されており、「愛する地域で、もう一度人の役に立ちたい」という想いを持たれていました。一方、地域では高齢化によりスクールガードの担い手が減少していました。地域の課題とＮ様の想いを結び付け、公民館や自治協議会、防犯組合の協力を得ながらスクールガードの活動を開始しました。

ある雨の日、スタッフが「今日は休みましょうか」と声を掛けると、Ｎ様は「雨でも子どもは学校に行っとるやろ。だから行かないかんやろ」と話されました。土屋さんはこの言葉から、「（ご利用者様の）本当にやりたい役割には天候も関係なく、スタッフの役割は止めることではなく、安全に続けられるよう支えることだと学びました。」と語ります。

子どもたちが地域の方に挨拶することも増えたようで、地域との交流が自然に生まれています。

この取組みが派生し、児童への紙芝居の読み聞かせや、神社での定期清掃、イベントでの出店などにつながっています。



様々な活動に発展しています。



まとばハタラク新聞で外部へ発信。

ハタラク姿が周囲を動かす

当初は「通常業務がおろそかになるのでは」という職員の不安もありました。しかし、交代で活動に同行した職員がＮ様の生き生きとした表情や地域とのつながりを目の当たりにしたことで、「自分も同行したい」という声が次々と上がりました。さらに、活動の様子をまとめた「まとばハタラク新聞」を受け取ったご家族やケアマネジャーさんからも応援の言葉が寄せられ、社会参加がご利用者様だけでなく、職員や地域、そして関わる方々にも良い影響を与えていることを実感しています。

活動を終えたある日、スタッフがお礼を言うと、Ｎ様は「こちらこそ、ご協力ありがとうございました。」と笑顔で声を掛けてくださいました。その言葉を聞いたスタッフは「私たちは支援しているつもりが、実はＮ様は地域を支える一人として役割を取り戻されていたのだと気づかされました。介護サービスを利用している時間ではなく、地域の一員として活躍する時間になっていたのです。」と語ります。

「社会参加を特別なイベントではなく、デイサービスの日常として根付かせ、ご利用者様一人ひとりの『やりたい』という想いを地域とつなぎ、役割や生きがいのある暮らしを支えていきたいと考えています。」（土屋さん）



種別：通所介護
所在地：南区
平均利用人数：22名
平均介護：2.4

中村 舞子さん

ご利用者様が地域で役割を持ち、「やりたい」「やってみたい」という思いを実現することで、生きがいや日々の生活の張りにつながり、喜びや楽しみ、満足感、達成感を得られることに大きな意義があると感じます。

ご利用者様の思いを尊重し、どうすれば実現できるかを一緒に考え、その方の特性や安全面に配慮しながら、一人ひとりに合った支援を行いました。

Ｎ様は毎回「地域の役に立ちたい」「恩返しがしたい」と話され、活動を楽しみにされています。真夏のスクールガードでは熱中症が心配でしたが、「大丈夫！行きます」と即答され、メモを何度も確認して笑顔で出発されました。その姿から、ご本人様の思いを尊重し、安全に活動できる環境を整えることの大切さを改めて感じました。

case 04

7つの力を現場で活かすヒント集

ハタラクの取り組みを進める中で、つまずきやすい場面とその工夫をまとめました。
7つの力とつなげて、できることから取り組んでいきましょう。

本人の「やりたいこと」「できること」を知る

本人の思いや希望を丁寧に聴き、やりたいことを引き出します。

1 本人の想いに共感する力　2 本人の状態を把握する力

よくある困りごと

- やりたいことを聞いても、上手く聞き出せない
- 意欲や自信が低下している

実践のヒント

- 過去の仕事や趣味の話を聞く
- 写真や思い出の品を見ながら話す
- ご家族からの情報も参考にする
- 小さな「やってみたい」に目を向ける

取組例

昔、花や畑いじりが好きだったご利用者を中心に、
事業所の花壇の草むしりや、地域の畑のお世話を始めました。
（P6参照）



事業所内でのマインドセット

職員みんながハタラクの価値を理解し、同じ方法を向くことが大切です。

4 場を整える力　7 継続する力

よくある困りごと

- 職員によって考え方の違いや温度差がある
- 忙しくて話し合う時間がない
- 失敗を恐れて踏み出せない

実践のヒント

- 理念や目的を共有し、目標を言語化する
- 定期的に事例を振り返り学び合う
- 小さな成功体験をチームで喜ぶ
- 「できたこと」に目を向けて評価する

取組例

事業所内で、なぜハタラクに取り組むのか、
介護職として関わる意義など、目的を共有しました。



地域の資源を知る

地域にはさまざまな人や場があります。つながりの第一歩を踏み出しましょう。

3 場を開拓／用意する力　5 本人と場をつなげる力

よくある困りごと

- どこに相談すればよいかわからない
- 地域の情報が集まらない
- つながりが一時的で途切れてしまう

実践のヒント

- 地域の会議やイベントに参加する
- 商店や企業、団体にあいさつ回りをする
- 地域の知り合いからつないでもらう
- 名刺交換や小さな会話から関係づくりを始める

取組例

もともと関係のあった地域住民に、小学校の先生を紹介
してもらい、学校とのつながりができました。



外部関係者と意義を共有する

家族や関係者と目的や価値を共有し、協力者を増やしていきます。

4 場を整える力　6 地域での自立や参加につなげる力

よくある困りごと

- 活動の目的や意義が伝わりにくい
- 協力が一時的になりがち

実践のヒント

- チラシなどを作成して説明する
- 相手のメリットを一緒に考える
- 事業所に来てもらい、利用者が活躍している場面を見てもらう

取組例

取組みについてまとめた新聞を作成し、
ケアマネジャーやご家族など関係者に広報を行いました。



発行元

福岡市
FUKUOKA CITY

介護サービス利用者の「ハタラク」を支える実践ガイド

2026年10月
介護サービス利用者の社会参加活動促進事業
福岡市 福祉局 高齢社会部 介護保険課
〒810-8620
福岡県福岡市中央区天神1丁目8−1